

パネルディスカッション

「オッサンの壁とクミジヨの壁・崖

～日本の男女間格差と世界の潮流 203050～

パネリスト

佐藤 千矢子（さとう ちやこ）
毎日新聞論説委員

愛知県出身

名古屋大学文学部卒業後、1987年毎日新聞社に入社。長野支局、政治部、大阪社会部、外信部を経て、2001年ワシントン特派員、2013年論説委員、2017年全国紙で女性初の政治部長に就いた。大阪本社編集局次長、論説副委員長、東京本社編集編成局総務を経て、2022年4月から現職。

著書『オッサンの壁』
講談社現代新書（2022年4月初版発行）



本田 一成（ほんだ かずなり）
武庫川女子大学 経営学部経営学科教授

法政大学大学院社会科学部研究科修了。博士（経営学）。東京都立労働研究所、労働政策研修・研究機構、國學院大學を経て、2022年4月より現職。

受賞：沖永賞、多田幸正賞、日本商業学会学術賞、日本労務学会優秀賞、日本労働ペンクラブ賞など。

著書・論文（近著のみ）：

『チェーンストアの労使関係』（中央経済社 2017年）

『オルグ！オルグ！オルグ！ 労働組合はいかにしてつくられたか』（新評論 2018年）

『写真記録：三島由紀夫が書かなかった近江絹糸人権争議』（新評論 2019年）

『ビヨンド！：KDDI 労働組合 20年の「キセキ」』（新評論 2022年）



『クミジヨ白書 2019』(連合栃木総研 2019 年)

『クミジヨ白書 2021』(連合栃木総研 2021 年)

「男女共同参画」から「クミジヨ」へ 労働組合における女性の代表性の現状と課題」『日本労働研究雑誌』2022 年 10 月号(最新号)。

「漂流者たち クミジヨの肖像」『労働の科学』連載中。

櫻田あすか (さくらだ あすか)

連合副会長

1996 年株式会社帝国ホテル入社。帝国ホテル労働組合執行委員、中央執行委員を経て 2013 年よりサービス・ツーリズム産業労働組合連合会派遣。中央執行委員(2016 年育児休職取得)、副事務局長を経て 2021 年より現職。



コーディネーター

清水 秀行 (しみず ひでゆき)

連合事務局長

2000 年 4 月 日本教職員組合中央執行委員。その後、千葉県教職員組合特別執行委員、中央執行委員、書記次長、書記長を歴任。2008 年 4 月 日本教職員組合書記次長、書記長を経て、2020 年中央執行委員長。2021 年 10 月より現職。



連合2022中央女性集会
パネルトークセッション
2022年10月21日(金)

クミジヨ調査について

武庫川女子大学
本田 一成

1. なぜクミジヨ研究を？



2. 「クミジヨ調査」から

MUKOJO
ACTION
2018-2019

クミジヨはマイノリティ
クミジヨの壁、崖、詰め
クミジヨの仕事イメージ
クミジヨ問題? それとも
クミジヨは・・・見た!

とちぎクミジヨ調査2019

ジェンダーギャップ経験

MUKOJO
ACTION
2018-2019

せめて女性役員が2人いれば・どうして酒を飲まないとコミュニケーションにならないのか・男性は一定年齢で青年部ではなくなるのに女性は定年まで青年と同じ・参加しづらい時間帯・「女性は参加するだけでいいから」・「無理して参加しなくていいよ」・何でも女性にやらせるのは女性活躍の意味をはき違えている・男性が参加すべき研修に女性も参加させられる・このような女性限定の調査をすること自体にジェンダーギャップを感じる・・・

連合関東Bクミジョ調査2021

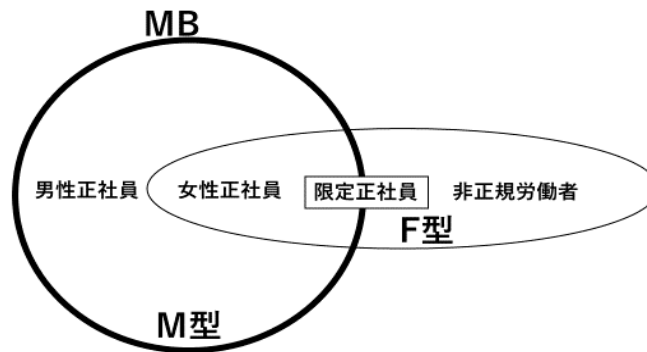
ジェンダーギャップ経験

MUKOJO
ACTION
2018-2023

お茶くみ、掃除、**会計係**、雑用は女性・**飲みニケーション**力で評価される・「**女性でも**できる役職をつくり役員を増やせ」・「よく**ご主人**が理解してくれるね」・一番大事なのは**会議の後の飲み会**・女性活躍や男女平等の会やイベントにすべて**女性が出席**・**OB**が出しゃばりダメ出しをする・飲み会で一致団結はやめて・少数の女性を交えて「**ガンバロー!**」・他労組や上部組織の来客に必ず**男性があいさつ**する・男も女もないから**女性部**の名称を変えたい・**女性部**を廃止したら女性役員が激減したので決断が早すぎた

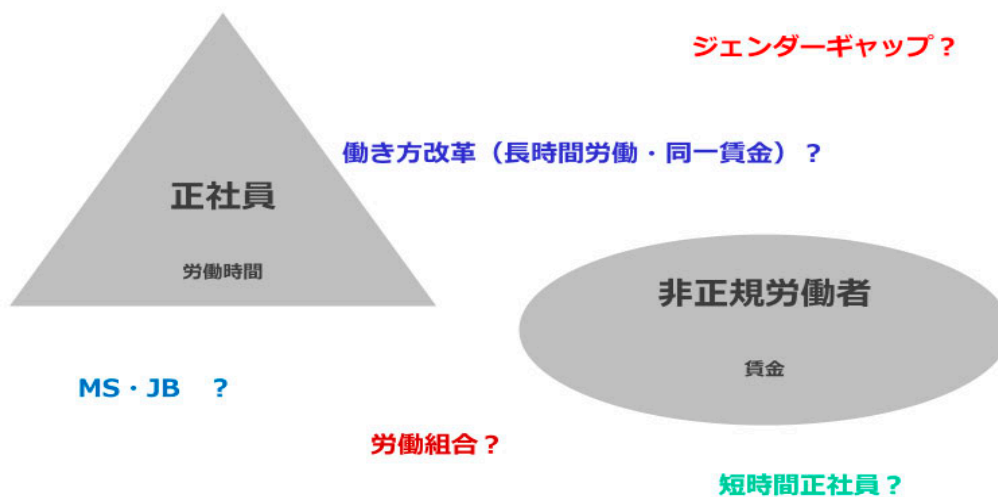
5

メンバーシップ型雇用とF型・M型



(資料) 本田一成「タイムトラベル労務事情・働き方改革のゴールデンルールを探せ 総括3(第36回)」『賃金事情』2021年

「労働者の宿命」論



(資料) 渋谷龍一「正社員とパートタイマーの「宿命」の違いに目を向けて」『情報労連REPORT』2016.7

漂流者たち クミジョの肖像

1

連載のはじめに

本田 一成

「クミジョ」？

私は現在50代半ばだが、労使関係や人的資源管理を研究しているの、20代の頃から仕事から労働組合の組合員や役員と交流してきた。初体験は1980年代末のことで、村越直嗣氏（当時ゼンセン同盟流通部会書記長）から、昭和風喫茶店に呼び出された時と記憶している。コーヒーを何杯もお代わりしながら、私が語る調査結果や研究内容に目を閉じたり、うなったりして聞く姿を見て、胸中では、こんな若造の話をよく聞きに来るもんだなあ、と不審に思っていた。

その後、つきあう産業別組合の幅が広がり、調査をするたびに企業別組合との交流が増え、ナショナルセンターとも知り合いになり、労組役員の知人が増え続けた。退職者や研究機関、教育機関、国際交流団体など「労組業界」の人たちも加わった。

これらの中にはちらほら女性役員がいたが、振り返れば、2000年頃から目に見えて増えていったと思う。もちろん、専従職員たちの多くは女性であった。だんだん女性たちとの交流が増え、女性集会などにも呼ばれるようになった。ナショナルセンターの職員になりたくて受験したがあえなく落ちた教え子の女性を、あわてて



ほんだ かずなり
武庫川女子大学教授
主な著書：
・『チェーンストアの労使関係』中央経済社、2017年。
・『オルグ！オルグ！オルグ！』新評論、2018年。
・『写真記録・三島由紀夫が書かなかった近江絹糸人権争議』新評論、2019年。

企業別組合にお願いするというコネ採用も経験した。

私は、秘かに女性役員を中心とした労働界の女性を「クミジョ」という愛称で呼ぶようになった。

クミジョ問題にたどり着くまで

クミジョたちは男性のようにビジネスライクではない場合があり、組織のことだけでなく自身のことを語るから、込み入った点や私的なことを話し込むことが多かった。話が合うのか、著者が聞き上手なのか、あるいは誰も聞いてくれる人がいないのか定かではないが、クミジョと相対すると、同じ体験をすることに気づくようになった。

クミジョはいつも不満だらけ、なのであった。

あるクミジョは労組のオトコ社会ぶりに怒りまくって、別のクミジョは話が通じないと思いついて、見ていて危険だと思うほど極度に消耗しているクミジョがいた。「バカバカしいので労組役員を退任したら会社も辞めたい」と言われて驚かされ本当に退職したと聞いてさらに驚かされたクミジョもいた。

そうかと思うと、一見すると不満たらたらだが、女性活動の武勇伝を語った後に女性もたるんでいると不満を向ける「男前」なクミジョや、男性たちをうまく使って先頭に立とうとする「ジャンヌダルク」なクミジョもいた。いろいろなクミジョがいるなあ、いやそれどころか全員が違うタイプなのかも、と勝手に想像していた。

だが、あくまでも個人的な関心や感想であり、間違いなく研究領域の守備範囲外だから、それ以上は掘らないでいた。クミジョ研究者に任せ

ておくべき、その結論を読むべし、と思っていた。結局、この気持ちが裏切られたことが研究の起爆剤になった。

というのも、これを読んでおけばよい、間違いない、というクミジョの本や論考を探しても見つからないし、見つけたはずなのに、とても満足できないという壁にぶつかった。だからといって特に何もしないが、クミジョとの交流はずっと続くから、興味だけが高ぶり、やがて焦燥感が募った。それだけ不満があっても誰も問題にしようとしもないのも奇怪に思った。

ここで、いったん気になると放置できず成算もないのに取りかかる悪い癖が出てしまう。果たして2018年に連合栃木総研（連合栃木総合生活研究所）から委託研究の打診があった時に、クミジョをテーマにした調査をしたいと回答したのである。そうすれば、いやでもクミジョと向き合うことになるからである。ちょうど長年取り組んでいた「チェーンストア労働三部作」が完成し、一区切りの時期であったことも大きい。

こうして2019年に栃木県のクミジョに関する研究プロジェクトがスタートし、宇都宮市へ通うようになり餃子が好物になった。研究プロジェクトといっても著者1人だけだが、「先生のやりたいように、ご自由にどうぞ」と言われたのがありがたかった。肝の据わった研究機関である。

この研究プロジェクト期間中に、驚くべき事件が発生した。2020年1月、住友重機労働組合連合会のクミジョが数億円を横領して逮捕されたのである。どうやって長年にわたり着服できたのか。クミジョが見ていた労組とはどんな組織だったのか。ジェンダー・ギャップをちゃっかり利用したのか。不謹慎だが興味は尽きず、できもしないが犯人に会って聞いてみたくなった。やはりクミジョはとて奥が深い、とこの事件ですっかりスイッチが入ってしまったのである。

クミジョの話を傾聴するようになったが、一方でクミジョは集団になると共感をテコに本音を言うことに気づいた。そこで匿名の座談会を企画していろいろと打診したがどこも乗ってこない。だが、ついにOKが出て「覆面座談会：

現役女性役員のホンネ」『情報労連リポート』が実現した。いい根性してる、とつい独り言が出た。

日本初「クミジョ白書」を執筆

栃木連合総研の研究プロジェクトではアンケート調査を実施した。「栃木県女性労働組合役員調査(略称：クミジョ調査)」である。調査屋は科学扱いされがちなアンケート調査を揶揄して、紙に字が書いてあるだけ、とよく言うが、調査票に初めてクミジョという字が印刷された。

2020年9月、このクミジョ調査を分析して報告書を発行した。サブタイトルは「とちぎクミジョ白書2019」である。なお、2021年にも調査を実施し、コロナ禍のクミジョに焦点を当てた「とちぎクミジョ白書2021」を発行する予定である。

門外漢のはずの私が、講演や取材など、あちこちからお呼びがかかるようになった。クミジョを語る初めての講演は、2020年10月、自治労栃木県本部であり、県内のクミジョたちが続々と集まってきた。クミジョ白書のおひざ元で、いち早くその存在を知ったからであろう。

ここでは、あえてクミジョが投影する労組の性質について辛辣なことを語り、労働界が全力をあげている女性組合役員比率向上作戦に抗うような発言もしながら意見交換を重ねた。だが特段の反発もなく、それどころか、クミジョ全員が報告や提言の内容を肯定し、非常に共感を覚えた、と高く評価してくれたのである。

以後、どこへ講演に行っても、常に95%超のクミジョから「とても腑に落ちました」「すごく共感できました」「自組織に持ち帰り意見交換を始めます」「少しやる気が戻ってきました」「違和感があるのは自分だけじゃないとわかりました」などと非常に好意的な評価を受けつづけている。

この連載の基本スタンスは、「クミジョ白書」であり、そこからもふんだんにデータを紹介するが、その背景となった私のクミジョ交流の体験こそが原点である。このため、連載に先立ってそれを記して、同じく体験を語ってくれたクミジョたちの思いに応えようと全力で執筆することを誓う次第である。

漂流者たち クミジョの肖像

8

クミジョ研究はなぜ存在しないのか(7)

本田 一成

なぜクミジョ研究はないのか

クミジョを知りたくて、探して読んだ研究について紹介し、思うままに記してきた。ここで一度整理させて欲しい。

結論から言えば、満足できるクミジョ研究の決定版には出会わなかった。何がそんなに満足できないのか？ 実は門外漢の私にはよくわからない。しかし、わかっているのは、現実には会うクミジョたちのことを勘案すると、どうも違和感があるという直感である。リサーチとはわからないことを調べるのではなく、おそらくこうだろう、ということを確認することだとすれば、それでは困る。

断片的にならいろいろ言える。だが、「なぜ、クミジョ研究はないのか」と問いかけたのであるから、それなりの答えを出してから、先に進もう。その答えがクミジョたちの感覚からはずれず、同意が得られるものであれば、クミジョ研究に一步近づいたことになる。ご意見、ご批判をお願いしたい（その方が助かる）。

労組の実践の問題・三原則

クミジョ研究がない理由を労組の実践の中に探そうとすると、いくつか思い当たる。まず、明らかなのは「男性性の原則」である。「労働組合法」の目的が、使用者と労働者との対等な交渉の実現にあるとすると、労組の活動はどうみてもたまたかいになり、その時に男性性が先頭に出てくる。主な活動の内容がそうであるように、その主体、獲得した成果などは男性優先と

なる。女性のための活動はあるにはあるが、ずいぶん後回しか無視され、隅っこか裏側に回る。ということは女性活動の主体が男性より前に登場することはまずない。

もっと簡単に言うと、労組の活動には男性のものと女性のものがあり、軽重がつけられ、女性のものは軽量級で、それを担うクミジョは少数で力不足でこれまた軽量級という位置づけになっている。だから、特例を除いて、あえて取り上げられることもない。「人的資源管理なんか複雑かつ高度なマネジメントの中でほんの一部で、他に大切に取り組むべきことは山ほどあるよ」という経営者の決めゼリフになぞらえると、「クミジョなんか……わが組織の中でほんの一部で……」ということになりそうである。

第2に、労組には「代表性の原則」といった実践上の力学が見られる。いずれの活動でもよいが、役員が目覚ましい成果を上げる場合がある。それは個人の手柄ではなく、組織があつてこそそのもの、とされる。労組は個々人の集合であつても、そこに1つの組織人格を与えた代表性が歩き出す。組織人格とは「みんな」であり、みんなの力のおかげなので労組に個人の顔はない。きれいに言うと、みんなのおかげ、は素晴らしいが、きれいに言わないのなら「ハイカイエスしかない」滅私奉公である。毎日残業ばかりなんでしょう。どうしてその人のおかげにならないか、自問してもよいと思う。別に、労組という組織がそうだというのなら、否定はしない。ただ、クミジョが浮かんでこない理由の1つだと言っているのである。その流儀を編み出したのはクミダンである。

第3は、比較的新手でなお流動的であるが、「同一平等性の原則」とでも言うべきものであ

ほんだ かずなり
武庫川女子大学 教授

る。均等法の制定を進めるクミジョたちに立ち
はだかった、例のアレである。「保護か平等か」
の二者択一にされてしまい、すべて同一にしま
いと平等ではない、というこれまた男性特有の
アレである。「せつかく女性を役員にしたのに、
我々と全然同じように仕事ができないんです
よ」と。

同一が平等なのか。クミジョもクミダンも腑
に落ちていないのに、実践上はどうしているの
か。こういう時の答えは1つしかない。棚上げ
である。一気に、男女はもう関係ない、と労組
は猛然と、男女の差をなくそうとする。女性部
をやめ、女性集会なのに男性がわんさか参加し、
この連載も男性が読んでいます。

一足飛びの「男女関係ない論」でも、うまく
いけば、自然に解決されるかも、という雰囲気
が満々である。クミジョを増やせ、というわけ
だが、増えても、クミジョは区別されることも
なく、当事者性がなくなる。こうなると、クミ
ジョたちも、女性の活動を矮小化されなくなる、
クミジョの責任にされずに済む、と歓迎する場
合がある。

他にもあろうが、こうした三原則がクミジョ
研究をストップさせてきた、と私は思っている。

研究者の態度の問題・三主義

クミジョ研究がないのは研究する人がいない
から、という答えが当然ありうる。これはいく
らでも展開できる。ただし、これまで取り上げ
たどの文献からどう思うか、ということではな
い。研究者の性向を加味して、自分も戒めて書
くことで十分に説明がつく。また、労組の実践
に研究者も影響を受けるのは当然で、共犯関係
のようになっている点大きい。

さて、第1は「無関心主義」である。労組が
発展しているという研究者は皆無であり、衰退
産業である。その証拠に、どの大学もほんの一
部を除いてもう労使関係論や労働組合論は教え
ていない。多くの研究者が、労組を研究対象と
することに見切りをつけ、他を探す。下手した
ら、人的資源管理論の1つに労使関係管理を挿
入して、労働組合管理を説いている。

労組が遠い研究対象なのに、クミジョまで目
が届くわけがない。もともとあった視点が消失

しているのに、もともとない視点を持って、とい
うのは無理である。クミジョに光が当たること
はない。

第2に、「忖度主義」がある。まだ労組を研
究対象にする奇妙な研究者がいたとしよう。研
究者は労組の実践原則に抗わない。クミダンと
交流すればするほど原則からはずれる研究に手
を出さず、原則以外の執筆、講演などはしない。
だから同じ研究者が何度も呼ばれ重用される。
私は残念ながら、何度も呼ばれない。

研究者のこの傾向に男女差があるかどうかは
不明である。だが、労組がいやがることをやる
わけがない。ただし経験則だけを書けば、男性
はまず原則以外のことはやらない。女性はクミ
ダンに忖度してそれなりにやるか、クミジョに
忖度してそれなりにやるかである。「X」のク
ミジョの研究が多いのもこの理由によるもので、
「Y」のクミジョの研究者は少ないし、い
ても成果の販路がないから微小な営みになる。

第3は、「保守主義」である。研究者は先行
研究のない仕事はしたくない。してはいけない、
と教えられる。カチカチに固いのである。なぜ
誰もやらないのだろう、と関心を寄せることは
あっても、あえて踏み出さない。海のものとも
山のものともわからないことに手を出すリスク
を負う研究者は少ない。

だから労組の研究をはじめても、女性の活動
に分け入っても、クミジョは自明のものか、あ
えて消すか、構図の中の遠目の背景か、何かの
比較対象か、いずれにせよ、何の保険もかけず
に、クミジョだけに絞るわけにはいかない。

以上のような、労組の三原則を覆すのは、な
ぜクミジョが必要なのか、合意ができていなか
ればならない。「労組の力を最大限にするのは
クミジョ」と。また、これら研究者の三主義を
覆すのは、研究者がこの言葉の重みを感じられ
る時である。

究極的には、クミジョも研究者も男性社会・
労組のコントロールから逃れていないのかもしれ
ない。コントロールはその主体も自意識がな
いからやっかいである。クミジョはどこへ消え
たのか。実践の主体から消され、研究対象から
も消され、どこへ漂流しているのであろうか。

(つづく)

漂流者たち クミジョの肖像

13

『クミジョ白書2019』(1)

本田 一成

先生はどうして クミジョ研究を始めたのですか？

10年以上前に出版した小著『主婦パート最大の非正規雇用』（集英社新書）はまだ売れている。小著と違って300万部ベストセラー新書を世に出した他社のカリスマ編集者に「これはホントに良い本。だが10年早いよー。」と言われたものだが、その通りになった。

実はこの本はクミダンから不評であった。冒頭から子どもを虐待する主婦パートが登場するから嫌気が差したようである。「そんな主婦パートは知らない」「まるで別世界の話だ」「違和感だらけだ」と。言い放たれた内容ではなく、その考え方というか、むしろよく考えないことや偏見や差別が何をもたらすのだろうか、と十分に怖ろしい気持ちになった。そんなことがあったとしても特殊事例だぞ、そんなことはしない、オレには関係ない、とフタをしてしまったり、オレの話にしてしまったりするのが常套手段なのだろうか。振り返れば、そう身震いしたのが原点である。

それから数年、セクハラ事件報道があるたびに聞いたクミダンの声でもっとはつきりと気づかされた。「オレはやらない」「もう何も言えないよ」「息苦しい」など。女性が悪いみたいに聞こえてくる。被害にあう側が悪者扱い。「セクハラをなくすためには担当者を男性に代えなきゃ」。えっ女性の雇用機会を奪う気なのか？クミダンと一緒に働くクミジョはさぞかし苦勞

ほんだ かずなり
武庫川女子大学 教授

しているのではないだろうか。いないことにされたり、考える力の隔たりが大きすぎて「バカ負け」（相撲用語）したりしていないだろうか。

ちよくちよくクミジョ研究を始めた理由を聞かれるが、苦境にあるはずなのに男性のせいであるで光が当たらない問題がある。クミジョもそうであり、ほっとけないと思ったから、としか言いようがない。

「とちぎクミジョ調査2019」に着手

第1回で記したように、2019年に「とちぎクミジョ調査」（栃木県女性労働組合役員調査、以下「クミジョ調査2019」と記す）に着手した。最初に考えたのは、クミジョにクミジョ自身のことを回答してもらうことと、クミダンとの比較はしない、ということであった。クミジョが回答する一般的なアンケート調査は、労組の活動についてたずねる。だが「とちぎクミジョ調査2019」はクミジョが主役なのだから、クミジョに焦点を当てる。また、いつものようにクミダンの比較基準にさせないどころか、クミダンには消えてもらう（クミダン調査ばかりなのだからバチは当たらないはず）。

次に考えたのは、さしあたりクミジョの対象を広げるのではなく、上層のクミジョから着手することであった。クミジョの代表者でよいと考え、一番勤続期間の長いクミジョへ調査票を配布した。要するに各組織のエース級、ベテラン、トップクラスのクミジョである。そんなクミジョがいないのなら、一番勤続期間の長い女性の書記、職員に配布してもらった。もちろん、彼女たちもクミジョである。決して上層以外のクミジョを無視するつもりはない。むしろ、そちらにも大きな関心がある。どうせ長いスパン

で研究することになるから、今回は「お手並み拝見」ということでよい。

さらに考えたのは、自由記入欄をできるだけたくさん取ることである。クミジョは不満だらけだから、アンケート調査に回答していくうちに、たくさん意見を書いてくれそうな気がした。そんなに意見が聞きたければアンケートではなくインタビューをやれ、と言われそうだが、その通り。だから、最後には、私に会って話をしてもよい、というクミジョがいたら連絡先も書いてもらうことにした。日頃から思っていることを話してくれそうなクミジョがいることを直感していた。自記式のアンケート調査では、一般に回収率や回答項目割合を低下させるから、これらはご法度である。

だが、結論を言えば、自由記入欄は満々に書き込まれ、私の予想を上回る人数のクミジョが会ってもよい、と回答してくれたのである（しかしコロナ禍に突入したことで、残念ながらまったく会えない結果となった）。

大学院生の時に調査の達人・川喜多喬法政大学名誉教授に聞かされた「調査にはノリ・チリ・タタリがある」という言葉を思い出した。調査は回答者が面白ければ協力してくれるが（ノリ）、面白くなければゴミ箱に投げ込まれるけれど（チリ）、回答しないとヤバイ場合は協力してくれる（タタリ）。

こうしてアンケート調査の設問や選択肢づくりに入ったが、これはお手のものである。アンケートは自分が見知らぬことや思いも至らぬことをたずねて驚くことではない。知っていたり、知らなかったりしても、おそらくそうだ、と思うことをたずねて、やっぱり、と臉を閉じる営みである。しかも対象者はエース級のクミジョたちである。既に目線は合っている。

ちょうど、連合が「構成組織、地方連合会における女性の労働組合への参画に関する調査」を実施しているところで、連合栃木の加盟労組も対応していた。これに目を付けて、同調査に協力した栃木の労組のうち女性役員が選出されている労組を特定できた。念のため連合栃木2019年構成組織名簿も照合して、女性役員がいる労組を網羅できた。これらを「クミジョ調査2019」に利用した。

惨憺たる調査結果を知る

連合の同調査が実施され、連合栃木が県内の調査結果を集計していたので、どうしてもそこへ目が行く。栃木のクミジョに関して知り得た結果の一部をざっと拾ってみて、また暗い気持ちを味わった。

例えば、三役を含む女性執行委員数が0人である労組は41.6%、1人が24.3%、2人が12.7%であった。委員長が女性で専従であるのは0%、同じく書記長は0%である。

女性の執行委員選出の人数や比率を規約等で設定している労組は2.3%、同じく代議員選出の人数や比率を設定しているのは4.6%、同じく各種委員会委員の人数や比率を設定しているのは、2.3%である。

団体交渉へ女性が出席していない労組は31.7%、労使協議へ出席していないのは34.7%、労使懇談会に出席していないのは34.7%である。運動方針に男女平等参画を明記していない労組は59.5%、委員長が男女平等参画実現について組合員にメッセージを発信していないのは66.5%である。

惨憺たる調査結果は、ひとり連合栃木の問題ではない。多少の差はあっても、どこも大体同じであろう。連合全体でみれば、すべての地方連合で女性執行役員が選出されているとか、女性三役も半数近くの地方連合にいたるとか言われても、人数とポストの問題なのか？ そういう話か？ と思ってしまう。

広くあまねく連合加盟労組で起きていることを忘れてはならない。

「クミジョ調査2019年」を実施する前なのに、あれこれと考え込んでしまったことを記憶している。クミジョはなぜいなかったのだろうか。いや、これまでいたクミジョは何をされてきたのか。クミジョが増えたら労組はどうなるのか。クミジョをあえて増やそうとするなら、それに応じてきたクミジョたちはどんな気持ちになるのか、などを延々と考え、すべて知りたくなる。また、それらの点を誰かが知ろうとしてきたのだろうか。クミジョ当人以外に誰もが十分に知らないうちに、増やそうとしてこなかったか？
(つづく)

連合 2022 中央女性集会
著者出演記念

「スマートな労組」?とんでもない! 激しく逞しくドラマチックな
闘いの歴史を余さず描く、刺激に満ちた傑作ノンフィクション

ビヨンド!

KDDI労働組合20年の「キセキ」

集会記念 特別価格

本田 一成 著

新評論

ISBN978-4-7948-1207-0 四六版並製 328 頁

税込定価 2,640 円 ▶ **特価 2,000 円(税込)**

※主催者様のご厚意により、
当集会に限り、特別価格にて
販売させていただきます。



「より良い会社を作る」ために奔走した組合員たち
ノンフィクションで迫る企業別労働組合の真実



一九七九年KDD事件の際には経営刷新を求めた大規模なデモを実施した
(写真提供…情報労連)

「労働組合っていうのは、先輩たちから預かった財産・宝物。だから、常に磨き続けて、ピカピカにしておかなきゃいけない。もし、磨き続けることができないなら、せめて汚さずに次の世代に渡していかなきゃあかんよな。それがお前さんたちの使命なんだ」(元KDDI労組中央執行委員・杉山豊治)

国際電気労組、KDD 労組を経て、激動ともいえる情勢下で 2000 年に誕生し、未来を託された KDDI 労組の「絶望」と「希望」、その 20 年間の「軌跡」に迫るノンフィクション。

華々しくも、あくなき激しい競争を繰り広げている情報通信産業にあって、様々な労働制度を実現しながら、非正社員への待遇、被災地支援など数々の取り組みで「先駆的」と呼ばれている KDDI 労組は、「スマートな労組」という印象がもたれ、名声を集めてきた。しかし、まったく、そんなことはない! まるで「プロジェクト X」のような逞しい気概をもって巻き返しを試みてきたのだ。度重なる企業合併やグループ経営で増加する未加入者たち、次々に見直しを迫られる労働制度、直面した葛藤や苦難から逃げなかったことで「奇跡」をつかみ、みんなで乗り越えてきたのだ。

日本の推定組織率は 2021 年に 17% を切っている。労働者には、不安や諦めを感じるだけでなく、それに踏み込んでしっかりと考え、企業別組合の本当の姿を凝視してほしい。労組関係者だけでなく、働く人々や管理職、経営者にも是非読んでいただきたい 1 冊である。たぶん、労組に対するイメージが変わるだろう。



本田 一成 (ほんだ・かずなり)
武庫川女子大学経営学部教授。博士(経営学)。人的資源管理論、労使関係論専攻。主な著書として、『オルグ! オルグ! オルグ! 労働組合はいかにしてつくられたか』、『写真記録・三島由紀夫が書かなかった近江絹糸人権争議』(共に新評論) などがある。



税込定価 3,080 円

◎ 本田 一成 著
好評既刊書



税込定価 2,460 円

●ご注文方法 新評論営業部へ直接お申し込みください。下記注文票に必要事項をご記入のうえ、FAX でお送りいただくか、もしくは必要事項をメールでお送りください。その際は「連合集会」とご記入ください。ご指定住所に送料無料で直接お送りいたします。お支払いは書籍に同封の郵便振替用紙(手数料小社負担)、もしくは銀行振込(三菱 UFJ)あるいは「きらぼし」:振込手数料はおお客様ご負担となります)にてお願い申し上げます。

ビヨンド! KDDI労働組合 20 年の「キセキ」 本田 一成 著

ISBN978-4-7948-1207-0 四六版並製 328 頁 **特価 2,000 円(税込)** 冊

オルグ! オルグ! オルグ! 労働組合はいかにしてつくられたか **特価 2,500 円(税込)** 冊

写真記録・三島由紀夫が書かなかった **近江絹糸人権争議** **特価 2,000 円(税込)** 冊

※このチラシの価格で、一般書店様でのご注文はできません。必ず小社宛に直接お申し込みください。

一般書店様では定価販売となります。

お名前

ご住所

電話番号

新評論 営業部 TEL03-3202-7391 FAX: 03-3202-5832
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田 3-16-28 E-mail: sales@shinhyoron.co.jp